



2008年10月15日 発行

2008年秋号

<第10号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/下野英世 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881 FAX06(6556)0882 works-union@y3.dion.ne.jp http://www.v-aid.org/union/

## 僕の夢

僕は、住吉区の大府急性期総合医療センターで、そうじの仕事。一日も休まずにしています。むかしにユニクロを辞めて、「ワークス歩」に行っていたときに、「エルチャレンジ」(就労訓練)への話をされてうれしかった。もう一回やりたいと思っていた。

でも、今の自分は、仕事で精一杯になっていて、自分では将来どうなるかわからん。不安もある。一人暮らしとか、朝にたまたま自分で起きることもあるけれど、もつと自分で起きたりとか、ダイエツトとか、自分でやりたいことがたくさんあるけれど、自分ではどうしたらいいかわからずかしい。僕はいつも悩む。

まだ将来のことはわからんけど、今は大塚愛とか a v e x とか、余暇活動で「なんばパークス」の流行の店に行くのが好きになっている。

結婚もしてみたいし、仕事も続けたい。いろいろ不安やけど、僕の夢です。

奥村 健司

# ワークス和なごみは今

## 個々のペースを大切に

「ワークス和」は、一九九八年四月一日に、「ワークス田積」として開所しました。二〇〇六年十月一日に、就労継続支援B型事業所として、再スタートしました。現在の利用者は、男性十名、女性三名の計十三名、職員三名で、男性利用者が多く、比較的自閉的な傾向の方が多いのが特徴です。

作業は、榑田積製作所のアジャスター(高さ調節ネジ)を組み立てたり、ビスの袋入れを中心におこなっています。

朝、自転車で駅から和まで向かう途中、同じく和に向かう彼らの後ろ姿に出会います。職員に気が付き、元気に挨拶する人。はにかんで満面の笑顔を向けてくれる人。職員には目もくれず、辺りの様子を樂しそうに見回しながら歩いて行く人。

そんな彼らを追い抜き和に到着すると、そわそわしながら、和の玄関が開く時間を待ちわびている人もいます。朝の体操を終えると、ユニオンが平成二十年三月から開始した、送迎サービスを利

用する人達を待ちます。送迎車が到着し、ようやく全員集

合、和の一日が始まります。

和のメンバーの一人に、歩行障害・認知障害を伴う、水頭症の彼がいます。送迎サービスができるまでは、往復三時間以上掛けて通っていました。

行きは歩行訓練を目的に歩いているので、帰りのみ利用しています。今でも、毎朝長い時間をかけて通勤しています。道中、自分のいる場所がわからなくなり、職員が迎えに行くこともあります。そんな毎日ですが、彼は何事にも一生懸命です。彼の口癖は「今日、仕事何？」。作

業が始まる前から一人、準備に取り掛かります。休日は整体に通い、自宅に遊びに来た友人とゲームに奮闘して、余暇を楽しんでます。そして最近では、自立を目指し、短期自立生活体験を始めることになりました。

いつも穏やかに笑っている彼ですが、きっと、彼にしかわからない悔しさや、もどかしさがあるのではないかと思います。しかし愚痴や弱音を吐かず、できることを一杯しようとする姿に、それを受け入れてきた強さを感じます。そんな彼のステップアップを、これからも応援していきたいと思っています。



自閉傾向の強い彼がいます。その彼に合わせて三年前和の中に、小集団で作業ができる第二作業室ができました。周囲の声や動きを気にせず、仕事に集中できるようにと考え、作られたものです。

この作業室ができ、以前よりは落ち着いた彼ですが、外の様子に騒がしい時にはやはり反応してしまいます。「仕事やめる！もう帰る！」その大声にまた、外の人達も反応し、注意の声が飛び交うのです。普段は和やかな空気が流れる和に、この時ばかりは険悪なムードが漂います。彼が悪いわけではありませんが、どうしても、他人の声や音が気になるのです。それでは、彼は完全に外と遮断された空間で過ごした方がいいのでしょうか…。

時折、彼は意図的に外に向かって声を発することがあります。そして外から返ってくる反応を樂しむのです。「ウルトラマンエイト〜♪」「そんななんないわ〜セブンやろ〜。」その時の彼の満足

気な顔と、皆の笑い声。皆と一緒にいると色々な声が気になる、でもまったく離れてしまうのは寂しい…そんな彼の心の声が聞こえてくるようです。

こだわりの強い人、大きな声を出してしまう人、周りに合わせて動けない人、会話が難しい人。皆、それぞれにそれぞれの特徴やペースがあります。それゆえに、時に衝突することもあります。お互いを理解することは、なかなか難しいことです。

ですが、表面的なものとは違って、抱えている苦しみや感じる喜びは、同じなのではないでしょうか。皆、それぞれの難しい部分を含めた一杯の力で、毎日を過ごしているのだと思います。十人十色の中、時には集団として、時には一人一人に対して、彼らの良さを引き出し、活かしていきたいような支援をしていきたいと思っています。(野々村)

# ワークスユニオンの目指すもの

平成十八年の「障害者自立支援法」の施行に合わせ、ワークスユニオンは、小規模通所授産施設（五カ所）を就労継続支援B型事業所「ワークス和（なごみ）」（本場）と「施設外支援・ワークス歩（あゆむ）」、「分場・ワークス匠（たくみ）」と、就労移行支援・就労継続支援B型事業を行う多機能型事業所「ワークス集（つどい）」として再編成しました。また七カ所のグループホームは、三十名定員の「ケアホーム」へとその運営形態を改めました。

平成十八年十月、ワークスユニオンが、障害者自立支援法への移行を同じくして、訪れたユニオンの創設者である山川宗計氏の急逝 混沌と混乱の激動期 私を筆頭に職員全員が、悩みもがき続ける苦闘の連続で、気がつけば二回目の秋を迎えようとしています。

その間、皆様に機関誌「ユニオン」をお届けすることも叶わなかったことをご容赦下さい。

激動の時期を何とか乗り越え、ワークスユニオンにも、私の心にも少しづつ平安が訪れ、「山川氏と多くの保護

信と責任」を持つて提供する事は、本当に可能なのでしょうか？

私たちには、不可能としか考えられません。

徹底的に就労支援・地域生活支援を実践した山川氏は、最後にやり残した仕事として、「何年にも亘り『一般就労』を目指し続けたが叶わなかった人や、一般就労のしんどさに耐えきれなくなった人たちの人生を創る実践」にワークスユニオンを創り、着手しました。



唱しました。

この「守りの支援」は、苦勞し続けた壮年期の人には、  
「これ以上、無理に頑張らなくてもいいんだ」との、心の平安と安堵をもたらします。

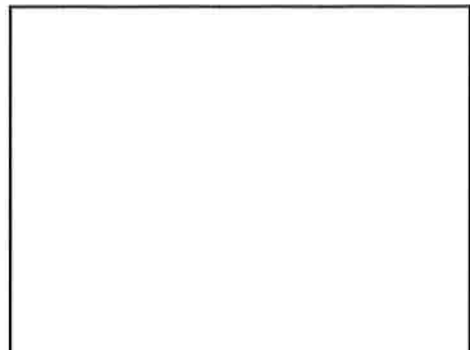
しかし、障害においても年齢においても、ある一定の人々を想定して創られた「守りの支援」が、有効性を發揮できるのは、ワークスユニオンの利用者と同じような経験を持つ人だけかもしれせん。

「力を育てる」という概念をあえて取り除いた私たちの実践は、伸び盛りの青年期の人たちなどには、「その人生の秘められた可能性の芽を摘み取る結果」をもたらすでしょう。

また、家族状況を含む本人の全ての情報を総合的に判断しないと、その人の生涯に直る人生設計はできませんので、「トータルケア」の提供できる人数には、自ずと限界もあります。

しかし、就労支援・地域生

平成十九年度総括会議にて



活支援をやり尽くした山川氏だからこそ提唱できた理念であり、社会資源の豊富な大都市・大阪だからこそ打ち出した「ワークスユニオンの理念」に対して、「時代の流れに反し、普遍的でない。」との批判や、提供できる人数に限りがあっても、その理念は頑なに守り、「ワークスユニオンにしかできない支援」をより発展させることが、私たちの使命といえます。

利用者一人ひとりの「ありのまま」を受け入れ、「人生」と「心」を守り、「一生涯に亘るその人らしい暮らし」の創造の手助けをし続けたいと考えています。（南石）

平成二十年年度理事会にて

その実践のための理念として「守りの支援」と「生涯に亘るトータルケア」を提

### 「守りの支援」とは何か

平成二十年三月十五日(十六日)、平成十九年度総括会議に「社会福祉法人北九州手をつなぐ育成会 西部エリアマネージャー 新原 淳氏」を講師としてお招きしました。

今年のテーマは「守りの支援とは何か」。山川宗計氏がユニオン創立時から掲げてきた「ユニオンの柱」ともいえる支援の本質を支援者全員で議論しました。

#### 「山川氏の生きてきた時代」

議論に先立って、新原氏より「自身の経験を基にワークスユニオンの課題を提起して頂きました。」

新原氏と山川氏が共に闘ってきた時代は、箱型の施設福祉が障害者福祉の主流でした。当時の「守り」には二つの意味がありました。①彼らを世間から守る。②世間を彼らから守る。

そのような時代に、「人間性の復権」、「人として生きること」をどう守るのか。山川氏は、「地域を耕す」を実践として地域福祉の最前線にいました。山川氏が、そこで悩んでいた事をワークスユニオンが、取り込み、職員の中で養っていくのが大切ではないか、とお話を伺いました。

#### 「どう意識を持って働くのか」

職員が増えると、全員が同じ

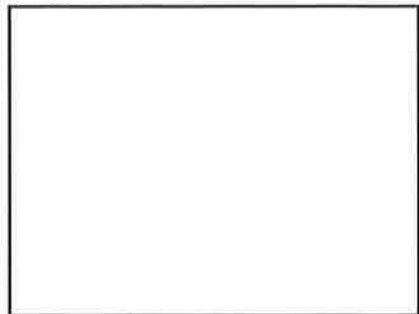
意識を持って働くのは難しい。大切なのは、「山川氏」という創始者が掲げた想いを議論することで、今後理想と構想を持つていければ、何でも出来るのではないか。

その為に「情報の共有」が大切。形式的なシステムで、考えていることが、明確な形で文章になっていることが大切。事実のすり合わせで時間を無駄にせず、情報を共有することで、個々の集団が、同じ方向を向いて共同作業をしているという実感が大切なのではないか。

その上で、どのようにしてカンファレンスを保障し、集団が「共有」出来るか考えて欲しいとの提起を頂きました。(続く) ※次回回は、「統一化と統合化」

「攻めと守りの支援」についてです。(荒木)

### 職員紹介



#### 吉川 季子

好奇心旺盛・食欲旺盛・歌や踊りが大好きで、ガハハと笑う元気なオバチャン四十七歳！

福祉大学・絵本の学校・ボランティアや学童保育・様々な所に顔を出し、たくさんの人と出会ってきました。

その中で芽生えた「人の役に立ちたい。」という想いが、ユニオンのドアをたたくきっかけになったそうです。

ワークスで毎日動き回り、「ワークスユニオンに入って7キロ痩せたわ!」と、うどん屋さんで大盛を食べながら、「どうして、こんなに工賃が安

いの?」と素直な疑問を投げかけてきます。

「利用者さんの元気をもらいながら、私が成長させられています。」と笑うその表情の中には、「言葉にならない本当の声を聞けるようになった。」という真剣な眼差しがあります。

#### 小野澤 彰宏

サッカーをこよなく愛する青年。冷静沈着な性格の持ち主ではありますが、試合中は熱くなる時もしばしば。

そんな彼は、今年4月に採用されたワークスユニオン1のフレンシユマンです。

知らない土地に行くことが好きで、お盆休みには、阿波踊りを体験してきたとか。

現在は和だけではなく、各事業所をまわる巡回職員の役割をこなしており、「巡回職員ゆえの悩みもあれば、学べることもある」と語ります。

「小さなことでも気付くことができるようになりたい。」実直な視線が、今後何を見つけてゆくのか…。とても楽しみです。(宮崎・多田)

### 編集後記

まず、いつもお世話になっております方々に、機関紙を約二年間お届け出来なかつたことをお詫び致します。

この機関紙「ユニオン」はワークスユニオンが軌道に乗り始めた平成十六年七月に、山川氏が「書き手が主張し、読み手が読みたくなるような機関紙を目指す」という熱い想いの下で、創刊致しました。

平成十八年八月、山川氏は、病に伏せられた床の中からも、機関紙に力を注がれ、その中で第九号が出来上がりました。山川氏の想いが詰まった機関紙を今見ると、多くの方が「悲しく、辛くなるが、元気をもらえる。」と言われます。

制度も職員も大きく変わる中、職員は、ワークスユニオンの創設時の想いを、何度も何度も話し合い、確認し合っています。

これからも、障害者を取り巻く環境は時代と共に変化を続けていくかもしれません。私たちは、私たちの方向を見失わないよう、前へ進んで行きたいと考えます。(荒木)